



特集  
生活者から見る  
「スマート」  
その4

# 高齢者支援に見るスマートのかたち

日本では4人に1人が75歳以上になるとい

「2025年問題」も迫るなか、

スマート化は超高齢社会の到来に

いかに対処しうるのだろうか。

介護の現場では、科学技術の英知を結集した

ロボットの導入が進む一方で、

地方のコミュニティにおける人々の絆を

見守りにつなげるという試みも始まっている。

現場に従事する担当者それぞれお話を伺った。

Case

1



Sota

## コミュニケーションロボットの活用

NTTデータ

「おはようございます。体調はいかがですか」

「今日はお出かけ日和ですね。朝食後、お薬を飲みましたか？」

手や首を動かしながら、かわいらしい声でそう話しかけてくるのはロボッ

トの「Sota<sup>®</sup>（ソータ）」（\*）。机の上に乗る大きさのこのロボットは、すぐそばのベッドにいる高齢者に話しかけ、その人の答えからキーワードを拾って対話をする。まさに、私たちが子どもの頃に思い描いていた未来が現

実となったような暮らしがそこにある。このコミュニケーションロボットを使った「高齢者支援サービス」の実用化に向けた実証実験が、2015年の3月末から5月末まで、社会福祉法人東京聖新会が運営する東京都西東京市



愛嬌たっぷりて人気者の「Sota」。

の特別養護老人ホームで行われた。目の前に現れた「未来」をお年寄りはどう受け止めたのだろうか。このロボットを使った高齢者支援サービスのシテムを開発した、㈱NTTデータ技術開発本部・ロボティクスインテグレーション推進室課長の武田光平さんが話す。

「実験の結果、高齢者の方もロボットに話しかけてくれ、ロボットのいる環境に順応してくれることが分かりました。104歳という高齢の方にも、『文明の世の中ですね』と素直に受け入れていただいた。最終日に持って帰るときには、『もう帰っちゃうの』と言う方もいたくらいです」

高齢者に安心感も抱かせるこのロボットは離床センサーや人感センサーと連動し、高齢者がベッドから離れたたり、ロボットの前を通ったりするとその動きを感じ。高齢者の現在の状況を把握する。高齢者がトイレでベッドを離れたのなら問題はないが、ベッドから落ちてしまったのなら、助けが必要になる。そこで、このロボットは、夜中で

も高齢者が起き上がるとその動きを感じて、「トイレですか」などの声かけをして、状況を確認する。

「センサーによって感知された情報は、クラウド上のデータベースに蓄積されます。離床センサーでは起床データなども取得することができ、これらのデータを分析することで、高齢者の生活をより支援できるよう、研究を重ねています」（武田さん）

収集したデータは、コンピュータによる、より適切な状況判断を可能にし、ロボットの声かけはさらに人間らしいものとなっていく。寂しいときにはい

つでも話せるし、いざというときにはケアマネージャーとも連携する。そんな可能性を秘めた「Sota」という小さなロボットが目指すスマートな未来は、どこに向かっていくのだろうか。武田さんが話す。

「高齢者社会に向けた認知症の予防が、このサービスの狙いのひとつです。もうひとつは介護者の負担軽減。たとえば夜中に高齢者の方がナースコールを押しした場合、ロボットが高齢者の状況を別室にいる介護者に伝えます。その情報を受けた介護者は、緊急度合いを判断しやすくなるので介護作業の負担

「Sota」の登場は、  
新しい高齢者支援の在り方を予感させる。  
人とロボットが共存する社会が  
また一歩近づいた。

が少なくてすみません。将来的には高齢者の独居家庭に置いて、ケアマネージャーの方に状況を知らせるシステムとして実用化することを考えています」

人とロボットが共存する未来を目指しているという武田さん。しかし、人と関わる仕事をロボットだけに任せるとは、決してないとも話す。

「たとえロボットのいる風景が日常になっても、ケアマネージャーの方が高齢者のお宅を訪問することには変わりません。人手による介護は絶対になくなりませんが、ケアマネージャーさんのいないときでもロボットがそばにいて、高齢者の安心感が高まると思うんです」

2025年問題を目の前にして、人間とロボットが車の両輪のように高齢者の生活を支える未来が現実味を帯びてきた。生活まわりの多様な情報を読み取ったロボットが、人間を支えていく未来こそスマートだ、と話す武田さん。人間の真心とロボットの技術が組み合わさった、生活者目線の新しいサービスが生まれようとしている。

NTTデータに入社する以前には航空宇宙工学を大学で研究していたという武田光平さん。子どもの頃は「ドラえもん」に憧れていた。



（\*）「Sota」はワイルドワンズの登録商標（第5788406号）です。

最新技術を使ったロボットによる高齢者介護というスマートもあれば、昔から変わらない、人間による、人間のための見守りもスマートのひとつの実現形態だ。古き良き日本を形作ってきた地縁・血縁・社縁の3つの縁が薄れていると言われている21世紀の日本で、地域のコミュニティを改めて構築し、人々の絆をより確かなものにした試みの一例が、岐阜市芥見東自治会連合会の「見守り愛チーム」だ。

「岐阜市の東端に位置する芥見東地域には、昭和40年代に行われた大規模住宅団地開発によって、たくさんの子育て世代が移り住みました。ところが月日が流れて、現在は高齢化率（65歳以上人口の割合）が36・8%という、岐阜市で三番目に高齢者が多い町になったのです」

そう話すのは、芥見東自治会連合会会長の多田喜代則さん。岐阜市役所職員を長年務めた多田さんだが、地域のコミュニティに深く関わりだしたのは定年後に芥見東自治会の活動を始めてからだ。今は定年して初めて知った、

地元と密着した生活が、楽しくてしかたがないという。

「見守りチームは2011年の12月に発足。12年の4月に全世帯の名簿を作成し、13年の4月に、『見守り合うと



のどかな町に  
昔ながらの人の触れ合いという  
絆を広げていくことで、  
地域を守っていく。

営業を営んでいた中野さんは、今は地域の若者たちのよき相談相手だ。中野さんが続ける。

「見守り愛チームは、近隣住民を1チームとし、1チームは4軒から8軒で構成するのが理想的であると考えています。現在、芥見東自治会の2300世帯を291のチームに細分化。昔ながらの『向こう三軒両隣』の精神で、日頃から隣近所お互いに見守りをし、頼まれたこと以外は干渉しないけれども、何かあれば相談のできる仲間として助け合う。そのためにも顔を見れば常に挨拶をする。そういう関係を目指しています」

もともと見守りチームの構想は、阪神・淡路大震災を教訓に、いざという災害のときに、誰がどの家にいるか常に把握できるように町づくりを目指す意図があった。その準備を進めていた

矢先、2011年3月11日の東日本大震災が発生。顔の見えるコミュニティの構築が喫緊の課題となったのだ。

「チーム内で作る名簿には、家族構成、持っている病気の症状などを書き込むのですが、これは少なくとも年に1回は更新するようにお願いしています。大事なものは、更新のときにチーム内で情報を確認し合う機会ができるということで、これによって近隣住民の関係をしっかりと保つことができるのです」

「見守り愛チーム」では、チーム内の住民がお互いに、新聞が溜まりっぱなしになっていないか、電灯がつけっぱなしになっていないかを確認する。また、頼まれれば体調のすぐれない人のためにゴミ出しや買い物、病院への付き添いといった支援を行うように促して、まさに支え合う地域コミュニティの形を体現するようになっていくのだ。

芥見東自治会連合会はさらに住民の足となるコミュニティバス「みどりっこバス」の運行を各方面と調整してス

タートさせた。

「みどりっこバスにはヘルパーさんが乗り込み、外出や買い物などの生活に困っている人をサポートしたり、行き先を案内したりします。ヘルパーさんは乗客の声をヘルパーノートに記録し、運営に反映しています」と、芥見東・

南地区コミュニティバス等運営協議会事務局長の山田正行さんが解説する。生活弱者が生まれない地域の形成に、みどりっこバスは大きく貢献しているのだ。

ほかに歌声喫茶や落語会、映画会、カラオケ大会など、地域住民の輪を広

げるさまざまな催し物を開催。そのすべてが住民目線の町づくりに集約されていく。

「こういった小さな絆の数々が芥見東の大きな絆につながっていく。何が起きてもこの町は守られていく。その思いで活動を進めているんです」と話

す山田さんの言葉に、多田さんも中野さんも頷く。目標は、どんなに歳を重ねても、人と触れ合える地域であり続けること。人の手がつくりだす多様なつながりの姿が、新しい明日をつくりだしていくのだ。

仕事人間だった男性3人が

引退後に見つけた

新しい活躍の舞台は、

「地元」というフィールドだった。



見守り愛チームの中心を担う多田喜代則さん(左)、中野秀樹さん(中央)、山田正行さん(右)。芥見東公民館の前で。

2008年に始まったみどりっこバスは11年に早くも乗車20万人を達成した。



緊急連絡先や医師への伝達事項を収めた「命のボタン」を各世帯の冷蔵庫に設置。



「絆」の言葉は見守り愛チームのモットー。連合会のTシャツにもあしらった。



災害時、携帯が通じなくなっても連絡できるトランシーバーを自治会内で常備。

